令和7年度　第五小学校　学校評価シート

＜学校経営方針の重点＞　1　豊かな心の醸成　2　確かな学力の向上　3　健やかな体の育成

	学校経営方針		具体的な内容	肯定的評価 教職員	保護者	児童	平均	評価	分析結果	改善策	学校関係者評価 評価	コメント	学校の見解と今後の方向性
1 豊かな心の醸成	「相手を思いやり、共に認め合う子」の育成を目指す	よさに着目し、互いのよさを認め励ますことを通じて、思いやりの心を醸成する。	人権教育の推進を図る。自分のよさを実感させ、自己肯定感を高めるとともに、相手を大切にする態度を育てる。	100	81	91	91	A	昨年に比べて教職員・保護者共に肯定的な意見が約１０％程度増えている。相手意識をもち、互いのよさを認める態度が定着してきている。	相手意識をもたせる取組や児童の自己肯定感を高める取組を引き続き継続していく。異学年交流による人権感覚の育成状況などを具体例を交えて発信していく。	A	異学年交流は友達や異年齢の存在を知り、関わり方を学べる学校ならではの経験となっている。 学校評価や教育活動の様子から今年度はよい状況にあると感じる。引き続きの取り組みを期待する。	「いじめ０宣言」、「行事等での異学年交流を通しての 互いのよさ見付けや感謝のメッセージ交換」「ウェルビーイングロード」等の取組を来年度以降も引き続き実施していく。教室配置をペア学年ごとに並べて配置し、日々異学年交流を通して人権感覚の育成 を図っていく。
			道徳教育の推進を図る。夢や希望を育み、心の教育の充実をさせるとともに、社会で生きる土台を培う。	100	78		89	A	道徳授業地区公開講座の開催を土曜日に設定したことで、参加者が増えた。また、教員をグループ毎に配置したことで意見交流を活性化させることができた。そのため道徳教育に対する理解が深まってきた。	引き続き、魅力的な意見交流の場の設定や、時程の工夫など保護者の参加しやすい会を企画し、道徳教育への関心を高めていく。	A	自分自身、人との関わり、学校や学級などの集団、地域社会や環境などを見つめ、生きるための土台が養われるとよい。　授業後の意見交流会への参加者がもっと増えるとよい。「道徳」をテーマにした意見交流は敷居が高いため今後も参加しやすい意見交流の場の工夫が必要である。保護者自身が土曜日開催の翌週代休に合わせて家族時間をつくる働き方意識改革につながるとよい。	今年度は、土曜日に全学年で授業公開と意見交流会を実施し、より多くの地域・保護の方の参加を促すことができた。道徳授業地区公開講座にて、学校職員、地域の方、保護者によるグループでの意見交換を行い、共に児童の心を育む体制体制づくりに務めていく。
			特別支援教室や教育相談体制の活用を通じて、特別な支援を要する指導の充実を図る。	100	70		85	A	関係諸機関やSCと連携し、子育てや教育に対する保護者の不安や悩みに丁寧に寄り添う体制をとってきた。教育相談体制の周知を図ってきた成果と考える。	今後も教育相談体制の周知に力を入れ、心配なことを相談でき、連携していけるチーム学校であるということを発信していく。	A	子どもの心身の発達や学習面、友達関係など、どの保護者も様々な悩みや心配事があるので、相談しやすい体制があれば安心につながる。保護者への周知を大切にしていく。 「特別支援教室」は目指す学習のゴールは同じでかつその子の(学び方に合った)カスタムメイド教室だと理解している。引き続き教育相談体制の周知・充実の継続に期待する。不安や悩み、困っているのは児童本人のはずである。	相談体制の周知も含め特別支援教育の意味、必要性の丁寧な説明の継続を保護者の子育てに対する不安や心配事に寄り添い、専門的な視点での支援を充実させていく。また、児童向けに特別支援教育の理解教育を行ったり、ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰや外部機関など相談窓口を周知させたり、特別支援教育についての理解も促していく。
2 確かな学力の向上	自ら考え、共に学び合う子」の育成を目指す	主体的・対話的で深い学びの充実に向けて、授業改善を図る。	ICTを取り入れた教材の工夫やめあて・振り返りのある授業づくりを通し、児童の学習意欲の向上と基礎学力の定着を図る。	100	84	81	88	A	児童の肯定意見が、昨年より１０％以上の向上している。児童がめあてや取り組み方を振り返り、自分の成長を意識できるようになったことが大きな要因だと考える。	学校公開や授業参観の場面で、ICT活用の有効性を示すことのできる事例を取り上げ、実態を観ることのできる機会を意図的・計画的に設定していく。	A	ICTが日常的に利用され、子どもたちの学習意欲につながっていると感じる。一人一人の能力に応じた利用の仕方ができるようになるとよい。「児童がめあてや取り組み方を 振り返り、自分の成長を意識できる」は授業の根幹である。ICTのみに限らず、その場面に最適なツール・方法での実現に期待する。	一人一台貸与を受けている学習用端末を、情報処理能力の向上を図ることだけでなく、教科等で育成を図るべき資質・能力に結び付け、より効果的に資質・能力の向上を図る活用の仕方を模索する。個別最適な学びを意識して活用を図る。
			考える場・話し合う時間の設定を通じて、考える力・表す力の向上を図る。	100	82	87	89	A	教職員は、互いに授業を参観し合い授業力を高めてきている。１単位時間に、自分の考えをもち、協働的に課題解決を図りながら学ぶよさを児童が感じ取っている。	教科毎のねらいに迫るための学習活動の工夫や、目的に応じた話合い活動の充実などを通して、思考力・判断力・表現力の更なる向上を図っていく。	A	思いを言葉にして伝えたり、人の話を聞いたりする機会が減り、考えたり話し合ったりすることが苦手な子が増えたように思う。意図的に時間を捻出し経験を重ねてほしい。ディベート形式を取入れた授業、意見や考えを引き出す工夫がされた補助教材の使用、児童の発言に対するフォローアップ時の児童への話し方等も含めた授業の様子を見る中で、先生方の熱意を強く感じる。	子ども同士話し合い、協働的に学ぶ場面を意図的・計画的に取り入れていき、多面的・多角的に物事を捉えることを日常化させる。そうして多様な価値観を包摂できる力を育んでいく。目的や相手、場面や方法について自問しながら思考し、判断し、表現できる力を育む。
			読書貯本通帳・読書月間の取組を通じて、読書好きの子供を増やす。	80	53	62	65	B	読書貯本通帳の取組や読書月間の取組に主体的に取り組む児童が減ってきている。本への興味関心が高められるような工夫や読書を推奨する取組が更に必要となっている。	貯本通帳の取組や読書旬間の取組、司書による読み聞かせや本の紹介などを通して、本のおもしろさや、奥深さに触れる機会を意図的・計画的に設定していく。	B	保護者も子どもも評価が低く残念に思う。本は新しい知識を得たり、広い世界にふれ、想像力、創造力を育てる。成長に応じてたくさんの本と出会ってほしい。家庭で保護者と一緒に楽しめるようになるとよい。親が本を読む姿を見ている子は読書好きになると聞くが、学校では貯本通帳等これまでの取組の継続に期待する。メディアは電子書籍もよい。本に触れるきっかけを増やすために「図書室に行く」だけを促すイベントもあってよい。	「梅の郷読書貯本」の取組や朝読書、読書旬間、読み聞かせ等の活動を通して、「本が好き」「読書っておもしろい」という児童を増やしていく。文字から想像を広げることの楽しさ、本から得られる情報の豊かさに気付かせることに意図的に取り組んでいく。
3 健やかな体の育成	「体を鍛え、自他の命を大切にする子」の育成を目指す	体力の向上と健康の増進を推進し、自分の命は自分で守ろうとする態度の育成を図る。	縄跳び旬間・持久走旬間などの一校一取組運動や休み時間の外遊び啓発を通して、体力の向上を図る。	100	94	88	94	A	持久走旬間や縄跳び旬間の取組が功を奏している。今後は、外遊びの日常化を図りたい。	持久走旬間や縄跳び旬間の取組は継続させながら、たてわり班遊びやクラス遊びなど、中休みや昼休みの外遊びを推奨するような取組を仕掛けていく。	A	外遊びの日常化はぜひ実行してほしい。体を動かしたり、友達との遊びを楽しんだり、何もしなくても外気にふれるだけでも気分転換になる。外はたくさんの学びがあるどんどん外遊びを推奨するような取組を仕掛けてほしい。ペア学年の教室配置もよい影響につながっていると思う。	年間を通し、外遊びを推奨する。持久走旬間や縄跳び旬間の取組は継続させながら、たてわり班遊びやクラス遊びなど、中休みや昼休みに体を動かす取組を仕掛けていく
			保健指導の充実を図る。「元気チェックカード」や感染症対策を通じて、健康的な生活習慣づくりを進める。	100	84	78	87	A	保健指導を定期的に行うことができている。インフルエンザは、流行時も、適切な対応がとれていた。「元気チェックカード」は、家庭と連携する手段として有効であった。	家庭と学校で連携を図りながら、児童の心身の健康と好ましい生活習慣の定着に力を入れて取り組んでいく。	A	心身共に健康に過ごすための知識や行動をこの時期に身に付けることは、生涯の健康維持に通じる。感染症などは兄弟姉妹の関係で広がっていくので、家庭、近隣の幼稚園保育園、中学校と感染症に関する情報を共有し、情報交換できるとよい。 子どもが自分の生活を見直し、メディアに触れる時間を減らすなど考える機会になり、とてもよいと思います。 毎年最も安定的で高評価の項目にも関わらず、今年度は児童評価に低下が見られたが、「元気チェックカード」は過去の状況からも目標達成のよい手段だと思う。	好ましい生活習慣の定着が図られる様に取組の継続に期待する。 元気チェックカードや歯磨きカレンダー等、効果が得られた取組については継続していく。メディアコントロール週間、家庭学習強化週間等の取組で、生活リズムを整えることについて家庭と連携を強め、児童の望ましい生活習慣の定着を図る。
			日常の安全指導や避難訓練を徹底させ、命を大切にする教育の充実を図る。	100	94		97	A	毎月の安全指導や避難訓練時の取組、命を大切にすることへの理解が高まっている。	実態に即した安全指導や避難訓練の実施を通して、更なる安全指導の充実を図っていく。	A	災害に備えた訓練は大切である。過去に青梅市で実際に起きた地震や大雨などの災害の話を聞いたり、写真や映像があれば見たり、現場を訪れるなどすると災害が身近に感じると思う。命を守るための基本を身に付けられるよう、体験を伴う繰り返しの訓練を緊張感をもって実施・指導を引き続きお願いしたい。能登の地震災害・東日本大震災等の事例を取り上げて指導してほしい。	毎月の安全指導や避難訓練の取組への理解が高まり、その効果についてよい評価を受けた。実態に即した安全指導や避難訓練の実施を通して更なる安全指導の充実を図っていく。体験が伴う繰り返しの避難訓練を通じて命を守るための行動について、基本的な視点を毎回与え、自身の命を守るための行動決定ができるように指導していく。
4 その他	「学校や地域を愛する子」の育成を目指す	家庭や地域、関係機関との連携を進め、しっかりとした信頼関係の構築を図る。	学校便りやホームページ、スクリレの活用を通じて、開かれた学校を推進する。	100	84		92	A	昨年度よりも保護者の肯定的な意見が約９％増えている。情報発信ツールを通じた丁寧な案内やオンラインでのアンケートが好評であった。	持続可能な範囲で、ICTを活用しての情報発信を更に進め、広く社会に開かれた学校づくりを進めていく。	A	学校の様子はどの保護者も気になることである。発信するのは大変だと思う。保育園では見守りカメラが設置され、いつでも様子を見ることができるが、学校にも見守りカメラがほしい。 学校の今後も視野に入れた、更に丁寧かつ簡潔で分かりやすい“見てもらえる”情報の発信に期待する。	情報発信ツールを通じた丁寧な案内やオンラインでのアンケートが保護者に好評で、連携が密になってきている。持続可能な範囲で、ICTを活用しての情報発信を更に進め、広く社会に開かれた学校づくりを進めていく。地域とも、スクリレでつながることができるように進めていきたい。
			教職員が、それぞれの専門性を発揮するとともに、一致協力して教育活動に当たる。	100	72		86	A	保護者回答で「分からない」が、２３．４％と依然として高い結果であった。教員それぞれの専門性を発揮し、一部教科担任制を取っていること等を知ってもらう必要がある。	学校公開や授業参観を通して、それぞれの教員の専門性が発揮される場面や協力して指導している場面を参観できる機会を設定していく。	A	保護者が来校する機会は行事のあるときだけで、すべての行事に参加できない保護者もいると思う。周知徹底は難しいと思うが伝え続けていくことが重要である。“教職員の専門性”の文字が参観に来られない保護者にとって専科以外にイメージしにくいのが「分からない」回答率の高い一要因の可能性がある。多くの保護者に実際の活動を参観以外でも知ってもらう。	学校公開や授業参観などの際は、地域・保護者の皆様にとっても分かりやすい学習指導案となるよう工夫して作成し、専門性が発揮される場面や協力して指導している場面を見ることのできる機会を設定していく。教科担任制を実施可能な範囲で取り入れ、それぞれの専門性の向上を促す。
			行事や授業の連携を通じて、西中学校区や幼保・様々な公共機関との交流を推進する。	93	56		75	B	保護者回答で分からないが、３５．９％と非常に高く、学校区ごとの取組への理解を高める必要がある。	幼稚園や保育園との連携、中学校区ごとの連携、関係諸機関との連携などの情報について、更に広く周知させていく。	A	保育園や幼稚園の年長児の学校訪問の他に、運動会に参加できたり、音楽会で鑑賞できたりちょっとしたことができると少しずつ就学に対しての気持ちが芽生えて不安が減るのではないかと思う。運動会では卒業した中学生もたくさん来ていた。就学前の聞き取りに来園して話を直接聞いていただき感謝している。卒園児の話も聞くことができ、職員で成長を見守っている。 前項目同様に他項目に比べ評価の年度間変動が大きく、意図が評価者に正しく理解されていない可能性もある。連携・交流活動の周知の中でこの評価項目の対象行事である旨を更に強調するような工夫を行うとよい。	教職員は、小中合同連絡協議会を通じ、学力向上、生活指導、特別活動、特別支援の4分科会で連携を密にとってきた。コミュニティ・スクール委員の方も参加し、共に具体的な課題について話し合う場を設けてきたところ、「大変有意義な機会だ」と価値付けていただいた。 いじめゼロの取組や挨拶運動等、西中学校区の三校で連携して行っている。児童の取組について、地域・保護者に伝える機会を増やし、その様子だけでなく連携の意義や取組の効果などについても保護者会等で伝えていく